

# LOH 症候群にも使ってみよう漢方薬

## ～ 新しい LOH 症候群診療の手引きを紐解く ～

長野赤十字病院

天野 俊康

【はじめに】2022年に、日本内分泌学会雑誌に全年齢に対する“男性の性腺機能低下症ガイドライン2022”が刊行され、さらに日本泌尿器科学会・日本メンズヘルス医学会編集による“LOH症候群診療の手引き”も発刊された。いずれにおいても漢方薬に関する記載がされており、漢方薬は男性性腺機能低下症・LOH症候群に対する有用な治療法の一つである。2022年版の“LOH症候群診療の手引き”を基にLOH症候群に対する治療に関して包括的に検討してみる。

【2022年版の“LOH症候群診療の手引き”の注目点】2007年版のLOH症候群診療の手引きでは、LOH症候群の診断基準値として、遊離型テストステロン(FT)値8.5pg/mlを正常下限、8.5～11.8pg/mlは男性ホルモン低下傾向群として、男性ホルモン補充療法の対象とすることが提案されていた。2022年版では、国際的基準に乗っ取り、総テストステロン(TT)値をまず測定し、FT値は補助診断基準として利用する。TT値の閾値は250ng/ml、FT値の閾値は30-40歳の2SDから7.5pg/mlとするが、アジア人の遺伝子的特性を考慮して、あくまでもhealthy aging for menの概念に従って臨床症状と併せて総合的に判断する、とされた。臨床症状を評価するにあたり、様々な問診票が用いられるが、Aging Males'symptoms (AMS) 質問票が国際的に広く用いられている。当然のことながら、LOH症候群に対する精査加療を目的とした当科受診者の98.5%は、AMSスコアが27点以上でLOH症候群の症状を認めていた。しかしながら、TT値が250ng/ml以下は16.4%、FT値が7.5pg/ml以下は54.0%のみであり、症状と男性ホルモン値との間に有意な相関関係がなく、臨床的に患者の症状を軽減することを最優先として積極的な治療を行っていくことの意義は高いと考えられる。

【今後のLOH症候群に対する漢方薬治療】LOH症候群に対して、血中TTおよびFTの測定値に関わらず臨床症状と併せて総合的に判断していくとなると、LOH症候群に対する男性ホルモン補充療法は、副作用の注意は必要であるが、以前より積極的に行われることが予想される。一方、漢方薬も今回の手引きに記述されたことで、その効果と安全性が周知され、一層使用することが勧められる。具体的な漢方薬としては、当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸、柴胡加竜骨牡蠣湯、八味地黄丸、補中益気湯、柴胡桂枝乾姜湯、抑肝散などが挙げられるが、可能であれば患者の「証」を考慮して投与することが望ましい。臨床的効果は、著効40.5%、有効30.4%、無効29.1%とされ、重篤な副作用は認められず、LOH症候群に対して有用かつ安全な治療法と考えられる。